第 97 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

二〇二四（令和六）年度 学位記授与式式辞

学長　藁科　勝之

観測史上最高を記録した弘前の雪も、ようやく解け始め、誠に津軽の春らしくなって来たこの季節、弘前学院大学から、新たに若い有為な人材をお送りできることを、嬉しく思います。皆さん、ご卒業、おめでとうございます。

皆さんが入学したときは、コロナ禍の真っ最中でした。しかし、さまざまな困難を乗り越えて今日に至ったことに対して、感慨深いものがあります。しかし、予想もつかない危機が、突然、襲うのだということにも、恐れを感じました。この1年だけを振り返ってみても、実に様々な出来事が起きています。

昨年の年明け1月元日に、能登半島の大地震。未だに復旧・復興もなされていない状況です。夏は従来にない記録的な高温、これによる米不足、また線上降水帯の大水害。一転して、この冬は10年来の豪雪で、災害警報が出されました。

一方、ウクライナ戦争は止むことなく、またパレスチナ、イスラエル紛争も続いています。その一方で、スポーツの世界では、大谷の歴史的快挙に湧き、さらに、日本に、ノーベル平和賞が、日本原水爆被害者団体協議会に贈られました。誠に予測不可能な現代であります。

こうした状況を捉えて、最近言われているある言葉があります。それは、「不確実性の時代」という言葉です。この言葉はカナダ生まれのアメリカの経済学者ガルブレイズが１９７７年に出した「不確実性の時代」"The Age of Uncertainty"という著作の題名ですが、これは、英国で13回のＢＢＣテレビドキュメンタリーになり、また、その日本語訳『不確実性の時代』は、１９７８年のベストセラーとなった有名な本です。約40数年前の「不確実性の時代」という言葉が、今また、取り上げられているのです。

この本の中でキーワードとなっている４つの単語があります。それは、「変動性」「不確実性」「複雑性」「曖昧性」というものです。変動、不確実、複雑、曖昧、というこの４つのキーワードから分かるように、まさに「明日何が起きるか分からない、予測不可能な時代」を意味します。これが今、再来しているのです。

今の状況を見ても、まさにその通りで、もう何が起きてもおかしくない時代です。私達は、どのように対応していけばよいのか、戸惑うばかりです。どのように向かって行くべきなのか。

目前の課題を解決するにあたって、過去の知識と経験だけでは全く前に進むことはできません。私達は自分事として考え、誰かに相談しても任せきりにはせず、自律的に課題に立ち向かって行かなくては、様々なリスクに飲み込まれてしまいます。それに恐れて立ち止まっていることはできません。停滞は即ち後退を意味します。

このように言うと、災害のことばかりが注目されますが、それだけではありません。一見、安定しているかに見える状態の中に、何がひそんでいるかを見なくてはなりません。危機は急に襲って来るというだけではなく、静かに忍び込んで来る、それに気付いた時には、かなり手遅れになっていることが多々あります。

大切なことは、危機意識を持つこと。「もしこうなったら、こうしよう」という心構えをしておくこと。「過去の経験・知識が役に立たない」と言われますが、決してそんなことはない。過去を見てその本質を学べば、挽回のチャンスのヒントはあるはずなのです。

皆さんは、その姿勢が、この大学で学んだ「畏神愛人」の精神とともに、いろいろな場面で、実は、活きて来るのだと思ってください。いえ、是非活かしてこれからの課題に立ち向かってください。

何があっても、ひるむことなく、真正面から受け止めて、じっくりと取り組んでください。これを皆さんに贈る言葉とします。

令和6年度　国語国文学会冬季大会報告

文学部　日本語・日本文学科　坂井　任

1月11日(土)13時から本学1号館大講義室において国語国文学会冬季大会が開催されました。学内・学外から33名の参加をいただきました。年末から大雪が続き、例年の3倍にもなる積雪で、交通の混乱もあり、状況によっては開催も危惧される中、当日は久々に青空ものぞき、無事開催できました。

まず、2年生鈴木優羽さん、山田優希さんから、昨年11月に行われた「文学散歩」の報告がありました。今年は昨年同様岩手県を訪れ、盛岡八幡宮、啄木新婚の家、もりおか歴史文化館及び盛岡城跡公園、もりおか啄木・賢治青春館を回り、歴史や文化への理解を深めることができました。

次に、大学院文学研究科2年応笛さんが、「現代中国文学に与えた写生文の影響―夏目漱石、魯迅、周作人をめぐって」という題で研究発表を行いました。魯迅と周作人は、夏目漱石から大きな影響を受けました。漱石の『クレイグ先生』と魯迅の『藤野先生』を比較検討し、ともに留学時代の恩師を描いた類似点の多い作品だが、漱石の軽快さとは対照的に、魯迅のユーモアは苦悩や皮肉、批判に満ちたものであるという相違点を指摘しました。魯迅と周作人の日本文学の翻訳は、中国文学に影響を与えました。二人が取り上げた作品の傾向は異なりますが、翻訳を社会変革の一環と捉え、国民の精神を向上させようとしたことは共通していました。漱石が正岡子規から受け継いだ写生文の手法を、魯迅は現実社会の批判に、周作人は日常生活の美しさ、人間性の表現に用いました。これらは現代中国文学に新たな表現方法を提供し、文学を社会変革の道具として位置づけたと結びました。

休憩を挟み、東北大学大学院文学研究科小河原義朗教授より、「東北大学における日本語教員養成の取り組みについて」と題して発表がありました。少子高齢化に伴う日本の人口動態の予測の説明があり、今後受け入れる外国人に対する日本語教育の重要性を指摘しました。「登録日本語教員」資格に対応し、文科省認定カリキュラムを実施している東北大学の、課程設置までの経緯、授業内容などについて詳しく話されました。

最後に今村かほる教授から、総括としての講評がありました。

この大会の準備・運営は、国語国文学会学生委員によって行われました。重ねてお礼申し上げます。

なお、本学も日本語教員養成課程を実施しています。学外の方もプログラムの受講が可能ですので、関心のある方は学務課までお問い合わせください。

弘大での日本語教育実習を終えて

文学部　日本語・日本文学科三年　太田　雄介

私は1年生の頃から日本語教育法を受講し始め、その集大成として今年度、弘前大学の留学生を相手に日本語の授業を行いました。この実習を通して、日本語を使っている母語話者では気がつかない日本語の難しさや、異文化と触れることの楽しさを学びました。

弘前大学の実習で最も苦労したことは、授業内で使用する語彙や文法を留学生の習得レベルに合わせてコントロールすることでした。留学生が知らない日本語を多用してしまっていたため、留学生の日本語への理解や活動を妨げてしまいました。このことから「自分が理解できているのなら、相手も理解できるだろう」という自分本位な考えを持っていたことに気づかされました。欠点を克服するために、担当教員と一緒に、授業内で使用する言葉を一言一句、文字に起こすことで自分が使う言葉を可視化しました。その結果、長い説明が減り、簡潔な指示を出せるようになったことで、留学生が主役の授業を行えるようになりました。3回の実習を通じて、失敗を学びの糧とし、ただ一方的に「伝える」のではなく、誠心誠意相手の立場に立って「教え」、学習者のインプットの手助けをすることの重要性を学びました。

実習を始めてすぐは、自分の劣っている点が目立っているように思えました。その点を思うように改善できず、途中で何度かくじけそうになりましたが、各授業後に行う「ふりかえり」では実習仲間のアドバイスも私を後押してくれました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

実習が終わり、晴れて日本語教員養成課程を完遂することができましたが、私はまだ卒業論文執筆や就職活動を乗り越えなければなりません。油断せず、実習で得た学びをこれからの活動にも活かしていきたいです。

ギビング・ツリーの開催

文学部　日本語・日本文学科　講師　井上　裕太

ギビング・ツリーとは、ひとり親や子どもの数が多い等の理由で「プレゼントをもらいにくい子どもたち」と「心優しいプレゼンター」を結ぶ心温まるクリスマスイベントです。具体的には、小学4年生までの子どもがプレゼントで欲しいものをオーナメントにしてツリーにつるし、地域の大人がプレゼントしたいオーナメントを見つけ、プレゼントを用意して届けます。本学では、２０２２年度より文学部開講科目「社会教育実習」（担当：坂本徹先生）の中で、ＮＰＯ法人の活動を学ぶ実習を実施しており、その中で、クリスマスに実施される「ギビング・ツリー」の活動を、坂本先生が理事長を務めるＮＰＯ法人日本人財発掘育成協会(Jinzai-Japan)との共催として支援しています。

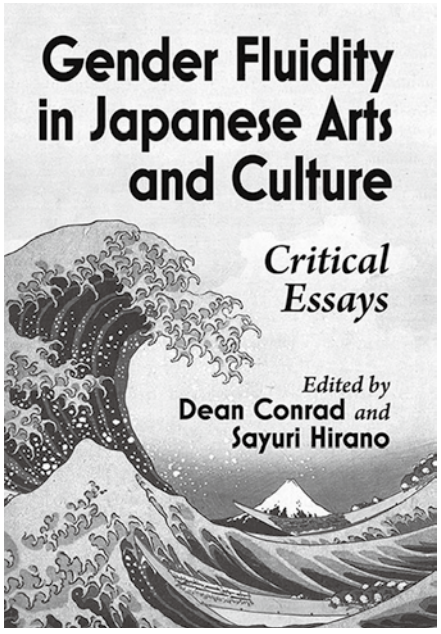
学生は授業の中で、オーナメントやプレゼンターの募集に関わりました。オーナメントから届けられたプレゼントの受け渡しは、12月21日(土)に本学礼拝堂で実施し、当日は、石垣雅子宗教主任によるメッセージや、藁科勝之学長と藁科愛子様によるチェロとピアノの演奏も行われました。真心による人と人との繋がりを創出するイベントを実施したことで、学生にとっても、互助の精神や社会と繋がることの重みを学ぶ貴重な機会となりました。

研究紹介㊶

私の研究領域について

文学部　英語・英米文学科　教授　神戸　直樹

私はジェンダー学とコミュニケーション学を専門、研究領域とし、論文や研究発表では主に英語を使用しています。現在の研究の１つが、映画などのメディアにおけるトランスジェンダー表象の分析です。２０２５年２月にMcFarlandから発刊された『Gender Fluidity in Japanese Arts and Culture: Critical Essays』（D. Conrad・S. Hirano編）に収められている論文が、このテーマの研究成果の１つです。この論文では、『彼らが本気で編むときは、』（２０１７年公開）と『ミッドナイトスワン』（２０２０年公開）というトランスジェンダー女性が主人公の２つの日本映画を分析しました。そして、これらの映画では「間違った身体」といった差別を助長するトランスジェンダー表象に加え、トランスジェンダーの女性は「女」ではないため、結果的に「母親」にはなれない可哀想な存在である、といった表象が見られると考察しました。現在は、日本に加え、性的マイノリティへの差別感情が根深いアフリカのウガンダやナイジェリアにおけるトランスジェンダー映画の分析を行っています。



もう１つの研究は、コミュニケーション学の領域であるレトリック・言説分析を用いたエコロジカルな男性性（ecological masculinity）という自然と男性性との関係に焦点を当てたものです。２０２１年にPalgraveから発刊された『Men, Masculinities and Earth: Contending with the (m) Anthropocene』（P. Pulé・M. Hultman編）に収められている論文が、このテーマの研究成果の１つです。この論文では、２０１１年の東日本大震災、その後の原子力発電所事故に対する村上春樹や池澤夏樹などの日本の作家の男性的言説を分析し、その背後に存在する「見えない男性性」と自然との関係を明らかにすることを目指しました。そして、これらの言説で顕著であった「無常」という概念が根底にある「諦め」の態度や「ノスタルジア」的な思考が、日本における男性の理想像の一例を反映していると論じました。現在は、自然と同様にこれまで男性より女性と結び付けられることが多かった「ケア」の概念とエコロジカルな男性性を関連づけた言説の分析を行っています。

談話室

学問にハマる

社会福祉学部　社会福祉学科　助教　宮田　将希

社会福祉学部の宮田です。ご縁があってこの弘前の地で大学教員生活をスタートさせた私ですが、文化や気候の違いに戸惑いながらも、充実した一年を過ごせたかと思います。

ゼミを複数担当させてもらい、その甲斐もあり学生の皆さんと共に自分も学びを深められたかなと感じます。そんな学生の皆さんの姿を見ていると、ふと自身が大学生の頃を思い返しました。

社会福祉学科のある大学に入学した私ですが、その当時社会福祉への向き合い方は「興味のある」程度でした。社会福祉の専門科目を沢山詰め込みながらもゼミやサークル活動に参加し、ごく普通の大学生活を送っていました。そんな大学生活を送る中、ある日衝撃的なニュースを目にしました。それはまだ幼い少女が児童虐待によって命を落としたという内容でした。社会福祉を学び始めて間もない自分にとって、まだどこか社会福祉の実践はイメージの中の遠い存在でした。ですが虐待死という言葉を目にした時、今もどこかで危ぶまれている命があるということを実感し、社会福祉の実践がとても近くに感じました。どこかの誰かが助けるのではなく、自分自身が子どもたちの命・未来を守らなければならないという使命感に駆られ、社会福祉という学問に向き合うようになりました。講義の受け方から勉強の仕方まで大きく変わり、社会福祉という学問にハマっていきました。

弘前学院でも様々な学問を学ぶことができます。ただ漠然と講義を受けているだけだと退屈な時間が続くかもしれません。それは学生の皆さんがまだ学問の奥深さや面白さに気付いていない、つまりハマっていないだけです。きっかけは何でもいいと思います。一度それぞれの学問に真摯に向き合ってみてください。学問を深めれば深めるほど、その面白さに自ずとハマっていくことでしょう。

健康づくり実習Ⅱの報告

看護学部　看護学科　小野　綾

本学で新たに開始した「健康づくり実習Ⅱ」が、先日無事に終了いたしました。この実習は、看護の対象は病院にいる患者だけではなく、地域で暮らすさまざまな人々も含まれるという考えに基づき組み立てられたものです。看護師として、病院での症状のケアだけを知っているのでは不十分であり、普段の生活背景や健康状態までを総合的に理解し、病院内外で連続性・継続性のある看護を提供できるようになることが求められています。

今回は複数の地域包括支援センターや障がい者施設を実習先とし、学生たちはグループごとに地域住民の方へ向けた健康教育プログラムを企画し、実際に実践いたしました。短い２週間という期間ではありましたが、メンバー同士が力を合わせ、目標を共有しながら懸命に取り組む姿が非常に印象的でした。実際に参加してくださった住民の皆さまも、健康について改めて考えるきっかけになったようで、その反応や評価は概ね好意的なものであったと感じております。

新しい挑戦の場をともに作り上げてくださった実習先の皆さま、そして貴重な時間を割いて参加いただいた地域住民の皆さまに、心より感謝申し上げます。今後も、このように地域と連携した実践的な学びを充実させることで、学生が幅広い看護観を身につけ、社会に貢献できる看護師へと成長していくよう、教育に力を入れてまいります。

健康教育実施当日リハーサルの様子

博物館実習を終えて

文学部　日本語・日本文学科卒　岩渕　悠真

八月中旬、私は弘前市立郷土文学館で実習をしました。文学者の歴史や、学芸員の仕事で最も重要であるという資料の保存、保管方法等について学びました。実技では、キャプションや図録の作成、借用資料点検表に基づいた確認、グラシン紙の掛け方について体験しました。

私はこの実習で、「講義では学ぶ機会が少なかったイベントの運営について学ぶ」という点を目標にしていましたが、実習中に年間で一番大きいイベントという、企画展にちなんだ記念講演会に携わらせていただきました。ここでは地域の方々や多くの施設との連携の重要性について学ぶことができました。

今回の実習体験の中で一番思い入れが強いのが、最終課題の文学者についての展示解説でした。内容は展示されている文学者から二人選び、各五分で展示解説を行うというものです。今まで一般の方の前で解説を行ったことがなかったため緊張しました。私は葛西善蔵、高木恭造について解説し、この人物について知らない人にも魅力が伝わるよう心がけました。しかし実際に行ってみると緊張で資料の方ばかり見て説明してしまったり、動いてしまったりしてうまく伝えられませんでした。そしてこの経験から、人に伝えるポイントとして、相手の目を見る、身振り手振りや問いかけをすることでコミュニケーションを取るということを学びました。

この五日間の実習で、今まで講義では学ぶことが少なかった知識以外の外部との連携、資料の保管の徹底やコミュニケーション、表現方法等、幅広い経験ができました。そして、この館の位置する弘前という街の地域性についても同時に学べました。学芸員過程で学んだ知識や経験は、他の場所でも活かせるものが多いので、将来に活かしたいです。

看護師国家試験・保健師国家試験を終えて

看護学部　看護学科　小野　綾

先日、本学の４年生たちは看護師国家試験・保健師国家試験に挑み、晴れて受験を終えました。振り返れば、彼らは臨地実習や卒業研究と並行しながら、日々の学習に力を注いでまいりました。実習先での経験を活かしつつ、研究やレポート、試験勉強を同時進行でこなすことは時には困難だったでしょう。限られた時間をいかに使うか、また体調管理を怠らずに学習を継続するかといった課題に、皆が真剣に向き合ってきました。この経験は社会に出てからも活かされると思います。

ときには学生同士で教え合い、お互いを叱咤激励しながら問題を解き合う光景も見受けられました。勉強の合間には励まし合い、時には厳しい意見を出し合いつつ、一丸となって合格をめざす姿は、学生が持つ底力を感じさせるものでした。教員一同もマンツーマン体制をとり学習をサポートしてきました。国家試験当日の朝、受験会場へ入っていく学生達の表情がとても良く、私たち教員も思わず「ここまでよく頑張った」と胸が熱くなりました。

これまでの努力と経験は、必ずや今後の看護実践の糧になるでしょう。合格発表を待つ間も、引き続き自己研鑽に努め新人看護師として活躍すべく学びを深めていってほしいと願っています。これまで支えてくださった保護者の皆さまや関係者の皆さまに、教員一同あらためて感謝申し上げます。

日本語・日本文学科卒業論文発表会

文学部　日本語・日本文学科　坂井　任

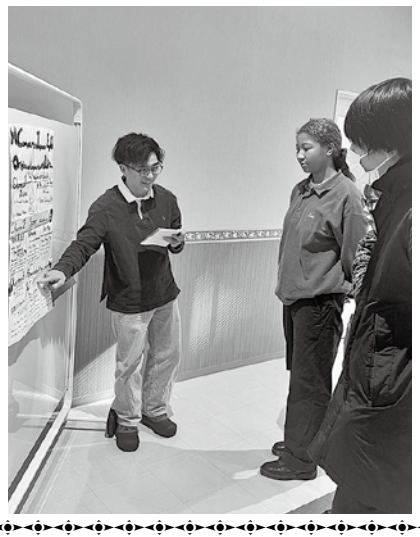
1月18日（土）13時から本学1号館講義室7・8で、四年生の卒業論文発表会を開催しました。各ゼミから1名以上が発表を行い、論文要旨の説明、引き続き質疑応答がありました。各発表者とも、レジュメやパワーポイントに工夫を凝らし、熱のこもった発表を行いました。三年生が多数参加し、発表に熱心に耳を傾け、また活発に質問もしていました。発表者の中には、卒業論文の大変な点や注意すべきことなど、新四年生へのアドバイスをしてくれた人もおり、次年度の卒業論文に向け、大いに参考になったことと思います。

当日の発表者と題目は次の通りです。日本語学、古典文学、近代現代の文学、サブカルチャーから社会問題に至るまでの幅広い日本文化から、様々なテーマで1年間取り組んだ成果です。

- 岩渕悠真　ねずみのキャラクターについての研究
- 國香喜彦　「仮面ライダー」論
- 小林弓親　「ゴジラ」論
- 西塚愛夢　学校生活におけるいじめ問題についての研究
- 福井帆乃夏　現代アイドル研究
- 藤田桜司　安部公房論
- 成田拓生　日本語の歌詞について
- 小山内緋流　宮沢賢治の作品における自己犠牲観及び他者愛
- 斉藤拓巳　「夕顔」巻における「某院の怪」の正体―もののけと六条御息所の関係性―

英語・英米文学科の卒業研究のポスター発表会

２０２５年１月25日（土）、英語・英米文学科では卒業研究のポスター発表会を開催しました。今年度の４年生が自分の卒業研究についてのポスターを作成し、学会のポスターセッションのような形で発表しました。発表はほとんどが英語で行われました。質疑応答は日本語で行われ、盛り上がっていました。今年の卒論のテーマは、文学から文化、英語教育、歴史的テーマまで多岐にわたりました。来年の卒論テーマと研究方法の参考となるようにと、一部の3年生の学生も参加してくれました。すべての学生の参考となるように、新年度には今回のポスターを1号館3階に掲示します。今年度の４年生の卒業研究に興味がある人はぜひご覧ください。今年度の英語・英米文学科４年生の卒業論文の代表例と各論文の概要を「弘前学院大学英米文学」の学会誌に掲載しました。学会誌は以下のＵＲＬで閲覧できます：https://www.hirogaku.ac.jp/faculty/bungaku/activty/e_literature/。



精神保健福祉実習を終えて

社会福祉学部　社会福祉学科卒　木村　彩乃

私は、精神科病院と指定特定相談支援事業所・特定一般相談支援事業所で実習をさせていただきました。そして実習を通して、精神障害に関しても精神障害を有する方の生活やニーズについて、また精神保健福祉士としての役割やかかわり方、連携などについて学び、理解を深めることができたと思います。その中でも特に強く印象に残ったことは、精神保健福祉士の自己覚知についてです。

精神保健福祉実習では、社会福祉実習に比べて「どう思った?」「どのように感じた?」と実習指導者の方から質問される機会が多かった印象がありました。患者さんや利用者さんの意思やニーズ、精神保健福祉士としてのかかわり方や今後の支援について考察することももちろん求められますが、実習生として自分自身がどのように感じたのかということを、素直にありのまま表現することが重視される実習でもあったと思います。自身がどのように感じたかを振り返り、それを実習指導者の方に伝えて指導をいただき、それをもとにさらに考察をする。このことを通して、私は、自身が無意識のうちに有していた偏見やジレンマ、そして自身のネガティブな行動傾向の一端に気づきました。それは自身の恥ずべきところ、短所であるため、それを受け止めて向き合う際は苦しみも生じましたが、この経験によって自己覚知を深めることができたと共に、患者さんや利用者さんへのより深い理解にも繋がっていくということを学びました。

この精神保健福祉実習で得た学びは、社会福祉の実践現場だけではなく、日常生活においても非常に重要なものであると感じています。この貴重な経験を将来に活かしていけるよう努めていきたいです。

最後に、指導していただいた実習指導者の皆さまや実習担当教員、相談に乗ってくれた同期にこの場をお借りして改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

社会福祉実習Ⅱを終えて

社会福祉学部　社会福祉学科３年　奈良岡　蓮理

私は２０２４年８月から約１か月間、児童福祉施設にて実習をさせていただきました。今回の実習では、個人に合わせた関わり方について学びました。

この学びを得ることが出来た場面として、余暇活動で外出する際に、活動の内容や外出先で訪れる施設利用のルールを説明する場面がありました。そのような場面を設けていても、近くにいる友達と話したり別のもの（掲示物等）に気を取られたりしており、話が正しく伝わっていないのではないかというような状況が見られました。その際には、子どもたちに個別に説明する必要があり、私は、その場で個別にルールの確認を行っていました。しかし、子どもたちは、周りの動きや音が気になるからかなかなか話に耳を傾けてもらえず、その結果、活動中のトラブルに繋がってしまうことがありました。この状況を児童福祉施設のスタッフの方に相談をしたところ、「環境を変え、１対１にすることで他のものや人に注意を向くことを防ぐことが出来る」と、教えていただき、実践してみるとスムーズに話を聞いてもらうことが出来ました。このことから、個人に合わせた関わり方には、子どもの特性を捉えて接するだけでなく、個人やその時の状況や環境にも着目して行うことが大切であることを学びました。

実習開始当初は、自分から子どもたちに話しかけたり、スタッフの方に質問をしたりすることがなかなかできずに悩んでしまうことがありました。しかし、実習指導者の方や施設スタッフの方々、大学での実習担当の先生からの適切なアドバイスやご指導のおかげで充実した実習となりました。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。今回の実習を通して学んだことを活かし、利用者の気持ちに寄り添い、ニーズや悩みをともに解決出来るような社会福祉士を目指して今後も勉学に努めていきたいと思います。

祝卒業

二〇二四年度　理事長賞授与者

文学部　英　語・英米文学科　佐　藤　亜　紀
日本語・日本文学科　山　内　　渚
社会福祉学部　社会福祉学科　芳　賀　周　平
看護学部　看護学科　堀　合　真　咲

四年間を振り返って

文学部　英語・英米文学科卒　佐藤　亜紀

入学当初に大学四年間は長いものではないと認識していましたが、卒業を迎えた今、想像以上にあっという間だったと感じています。新型コロナウイルスの影響で様々な制限がありましたが、制限の中でできるだけ自由に、楽しく講義をしてくださった先生方に非常に感謝しています。

高校英語を終えてさらに英語を学びたいという思いがあり入学を決めましたが、最初は大学の講義に対して不安がありました。ですが無事に友人も出来、友人のおかげで講義に対しての不安も少なくなり、大学生活に充実感を感じられるようになりました。演習発表や試験期間は忙しかったものの、友人と励まし合い乗り越えることができました。

三年生からは漠然と考えていた将来を現実的に、具体的に考えなければいけない就職活動の準備が始まりました。将来に対してネガティブに考えてしまいがちでしたが、就職課の竹内さんに何度も相談させていただき、最終的に無事内定をいただくことが出来ました。

就活を終え本格的に始まった卒業論文の執筆は、最初は順調だったものの、書く内容に納得がいかなくなり、不安も募り、段々と手が進まなくなりました。私自身、興味のある他の講義も残っていたため、それらの試験と重なった時期は非常に大変でした。ですが、マックウィニー先生は沢山のアドバイスをくださり、無事に書き上げることが出来ました。感謝の気持ちでいっぱいです。参考文献を読み、整理して、自分の言葉で書く作業は大変でしたが、やりがいと達成感を感じられた良い経験だったと思います。

充実していたからこその短さだとは思いますが、この充実感は自分ひとりの力では感じられなかったと思います。優しく頼りがいのある友人や些細なことも相談に乗ってくださった先生方、励ましの言葉をくださったアルバイト先の方々や最後まで支えてくれた家族には本当に感謝しています。本当にありがとうございました。四月からは大学生活とはまた異なる不安を抱くことになると思いますが、やりがいを感じられるように学ぶことをやめずに頑張り続けたいと思います。

四年間を振り返って

文学部　日本語・日本文学科卒　山内　渚

一年生の頃は、環境の変化に緊張や不安を感じながら、新たな生活に慣れようと必死でした。初めて大講義室で講義を受けたときは、大学生になったことを改めて実感したのをよく覚えています。

高校よりも自由な分、自分の責任でこなさなければいけないことが増え、初めは戸惑ってばかりでした。一人で取り組むのは不安で、一緒に履修登録をしようと声をかけた友人達とは、そこから四年間お互いに助け合える仲になりました。あの時、声をかけるために勇気を出せてよかったと感じると共に、仲良くしてくれた友人達への感謝でいっぱいです。

大学生という期間の中で、興味のある分野について学ぶことができたのはもちろん、これまで知らなかった分野に興味を持つことができたというのは、自分の視野を広げられる良い経験だったと思います。本学は、キリスト教について学べるという特色がありますが、正直なところ最初はそれほど興味を持っていませんでした。しかし、礼拝堂のステンドグラスの下で、パイプオルガンの演奏を聴くという体験を通して、これまで自分の生活圏になかったキリスト教が、身近なものになったように感じました。

他にも、第二外国語の講義を受講したことで、言語の勉強についても興味を持つようになりました。ラテン語や古典ギリシア語についての講義も受講しましたが、こういった機会がなければ、自分ではなかなか手を出さない言語だろうと思うので、学ぶことができてよかったと感じています。興味を持った物事をもっと知るために行動した、という経験からは自身の成長を感じられました。

不安や戸惑いを抱えつつも、私がこの四年間を過ごすことができたのは、周りの方々や家族の支えがあってのものだったと強く感じています。これから始まる社会人としての生活へは、入学当初のように不安に思うことは沢山あります。しかし、周囲への感謝を忘れずに過ごし、より良い人生を歩んでいきたいです。

学生生活を振り返って

看護学部　看護学科卒　堀合　真咲

学生生活を振り返ると本当にあっという間で楽しいことや達成感を多く感じた反面、辛いことや悲しいことも多くありました。特に、高校と違い、学ぶ分野が専門的な知識を必要としていることが何よりも理解に時間がかかり、何度も壁にぶつかりました。しかし、仲間と分からないところを一緒に考えたり、納得するまで先生方が親身に教えてくださったりといった支えがあったからこそ4年間を乗り越えることができたのだと思います。

1、2年生の頃はコロナ禍であり実習先に十分には行けず、リモートでの実施となりましたが病院実習に行くことはできなくても学年が上がるにつれてより一層専門的な知識や技術は増えていきました。思うように行けていない分、実際の病院実習を考えると不安は募るばかりでした。3年生の祝福式を終えて、ようやく始まったのが領域別実習です。1、2年生で病院に行けず、イメージができなくても、現場での判断力やその根拠となる知識は3年生レベルを求められるため勉強不足を大いに感じました。そんな時に助けられたのがやはり仲間の存在だったと強く思います。一緒に考えて悩み、休日には話をひたすらに聞いてもらうだけで心が落ち着き、また頑張ろうと前向きな気持ちになりました。また、少人数の学年だったこともあり、3年生まで関わりのなかった仲間ともこの実習をきっかけに仲良くなり、同じ目標に向かう仲間だからこそ支え合える良い関係を築けていくことができました。4年生では学生生活最後の思い出づくりと国家試験に打ち勝つためにみんなでメッセージを書き合い、励まし合いながら万全の状態で挑み、やり切ることができたと思います。

これから社会人となり、今よりも学びと個人の責任感が大きくなっていきますが、これまでの学生生活を思い出しながら、それらを糧に自分自身の看護師像に向かって、一歩ずつ進みたいと思います。最後に、どんな時も支えてくれた仲間、親身に寄り添って下さった先生方、充実した大学生活を過ごさせて下さった方々には感謝しています。本当にありがとうございました。

大学生活を終えて

社会福祉学部　社会福祉学科卒　芳賀　周平

私は、一昨年の四月に本学に編入学しました。約三年半の社会人経験を積んだ後の決断は、私にとって大きな挑戦でした。社会福祉士の国家資格の取得を大目標としたものの、二年間という限られた期間で実現できるのか、そもそも年齢の異なる学生の皆さんとともに過ごす大学生活に順応することができるのか、不安や戸惑いがありました。しかし、丁寧なご指導をくださった先生方、年齢の壁を越えて親しく接してくれた学生の皆さんのお陰でそのような思いは早々に消え去り、結果的にとても充実した二年間となりました。

二年間を振り返ると、すべてが学びの日々でした。三年次では多くの講義や演習を受講しながら国家試験対策を並行し、主に基礎固めをしていきました。社会福祉について新たな知識を得るとともに、自らの経験や適性、意欲から導き出される将来の選択肢が多くあることを知り、熟慮を重ねました。四年次では、残された講義や演習を受講しながら、卒業論文の執筆、二つの社会福祉実習、就職試験、国家試験の受験などをこなしました。そして、すべてにおいて自分の目標を達成することができたと実感しています。過去に経験のない忙しさに頭を抱えることもありましたが、「すべてに妥協せず、成し遂げる」という編入当初からの強い意志を貫徹し具現化することができたことは、私の大きな財産となりました。

三〇歳を目前に控えた私は、ここまで至るのに「遠回りをした」と感じていました。しかし思い返せば、人生のなかで行ってきた一つ一つの選択が線として結ばれ、葛藤や挫折ですら無駄な経験は何一つなかったと気がつきました。そして何より、自己中心的な選択の数々を受け容れ支えてくれた家族や友人、かかわりを持ってくれたすべての人たちに感謝の気持ちで一杯です。これからは私が、本学で学んだ社会福祉の知識やマインドを活かし、人生に迷いや悩みを抱える人々の選択を支えられるよう精進したいと思います。

日本ソーシャルワーク教育学校連盟の成績優秀者表彰される

この度、二〇二四（令和六）年度の成績優秀者が決まりました。

この賞は、社会福祉士・精神保健福祉士養成課程修了者で、学業成績・人物ともに優秀である学生に対し贈られるものです。

日本ソーシャルワーク教育学校連盟成績優秀表彰者は、大場遥貴さん（社会福祉士養成課程）、齊藤帆南さん（精神保健福祉士養成課程）です。